

「花工房」8年間の歩み

佐竹 千代子・神山 久枝・瓜生 恒子・垂井 ふさ子・田淵 鈴枝・長里 芙美子・澤 七緒子
(NPO法人 人と自然の会 花工房)

はじめに

「花工房」は、来館者に簡単な手作り体験を通して自然に親しんでいただくことを目的に季節の草花でしおりを作ってもらえるコーナーです。

2000年4月の第3日曜日、毎月開催している「ボランティアデー」(注1)での「押し花のしおり手作りコーナー」がその始まりです。以後、2008年現在に至るまで毎月第3日曜日に「ひとはくサロン」で開催を続け、しおりの他にもその時々季節感あふれる展示物やクラフト体験コーナーなどを取り上げてきました。

これらの活動を中心になって続けてきたのが、NPO法人人と自然の会の澤マズミ会員でした。残念ながら2007年6月還らぬ人となりましたが、闘病中も毎月の「はくぶつかんの日」を楽しみに、活動を続けてきました。

2008年2月11日に人と自然の博物館で開催された第3回「共生のひろば」では、彼女の「ひとはく」への熱い思いを込めた作品を展示しました。この報告では、花工房の8年間の活動を振り返り、来館者のみなさんが自然に興味を持ち、楽しんでいただき、一人でも多くの「ひとはくファン」が生まれることを願って、活動してきたことを述べていきたいと思ひます。

1. 花工房の出発と目指すもの

(1) 出発

人と自然の会に1台の「ラミネーター」がありました。ひとはくフェスティバルのイベントで使用するために1997年に購入したものです。しかし、登場回数は限られていました。フェスティバルでの出し物に「秋の葉でしおりを作る」を提案し、購入のきっかけを作った澤マズミ会員は「この機械に活躍の場を与えなければ！」と責任を感じ、思案していたそうです。2000年初頭、当時ボランティアデーとして毎月第3日曜日に来館者向けのイベントを行っている部屋の片隅を使わせてもらい「押し花しおり」を体験してもらおうことを考え、会員に協力者を募りました。3名の賛同者が手を挙げました。こうして花工房はつつまじやかにデビューしたのです。

ところが、博物館の「新展開」により、第3日曜日には「はくぶつかんの日」としてさまざまなイベントが催されるようになりました。花工房のデビューは部屋の片隅でひっそりと・・・でしたが、ひとはくサロンの入り口、そしてセンターへと進出を重ね、ひとはくサロンの中心的なイベントとなり、現在に至っています。

(2) 目指すもの

花工房では季節の草花を押し花にして「しおり」を作ってもらいますが(図1)、その他に来館者によく見える一角にフキノトウやツクシ、秋の七草、などを手始めとした季節の草花を展示しています。これは、常日頃から「博物館には生きたものを見たり触ったり、においをかいだりとか、そういう五感を全部満足させてもらえるようなところがどこかにほしい。」と澤会員が主張していたからにはかなりません。ささやかな展示ですがこれをきっかけに会話が生まれ、また来てみたいと思ってもらえる雰囲気作りを心掛けています(図2)。

また、花工房は、基本的に体験料を徴収するというスタイルを貫いています。花工房立ち上げのきっかけが出番の少ない機械の有効活用であったこととも関連するのですが、活動することで会に経済的な負担をかけない。材料費は参加者に負担してもらいその分楽しんでいただく。



図1. 押し花のしおり
‘しおり’という限定された大きさの中におさめた季節の草花。ラミネートフィルムでパウチすると一層の輝きを見せます。



図2. 「花工房」のようす
2004年11月14日、人と自然の博物館4階ひとはくサロンにて

これが当初からの基本です。体験料を徴収してみると無料で行なう場合よりも参加者が真剣に取り組むことも、経験で実感しました。かわりに、こちらもしっかりした質の高いプログラムで臨まなければいけないという面もあり、花工房には欠かせない基本姿勢となりました。

2. 花工房の準備から当日まで

(1) 準備

花工房のメインは先にも述べたように「押し花しおり」です。季節の野の花を楽しんでもらうには準備として花の採集があります。美しい押し花にするには当たり前ですが、旬の花が必要です。でも、自然を相手の作業は思うようにゆかないこともあります。気候の変化で当てにしていた時期に咲かなかったり、昨年までは最高のポイントだったところが宅地開発で跡形もなくなっていたり、先週は咲き乱れていた土手の花が無残にも刈りはらわれていたり、悲喜こもごもです。

(2) 乾燥

採集した草花は紙に挟んで、さらに陶器の押し花乾燥器に挟み、電子レンジで30秒～2分くらい加熱します。急速に水分を取ることで美しい色の押し花ができます。これを乾燥シートに挟んで重石をかけます。乾燥シートは適宜交換が必要です。

(3) 当日

心をこめて作った押し花を並べます。台紙に好みの押し花を選んでデザインしてもらいラミネートフィルムに挟み、ラミネーターで加熱します。穴をあけ、リボンをつけて完成です。台紙にデザインしたものをフィルムに挟む時に静電気が起こり、せっかく苦心して並べてもらった草花の配置が台無しになることがあります。そうならないように一番気を使うのがこの作業です。一生懸命自分で作った作品を手にした笑顔は最高です。こちらもうれしくなります。

3. 博物館の外へ

花工房は博物館での活動だけでなく依頼があれば可能な限りお受けするというスタイルでここまで来ました。振り返るといろいろな場所で活動してきました。

ひとはくキャラバン

ひとはくのキャラバン事業では、2002年3月朝来、9月神戸に参加させていただきました。朝来では空き時間を利用してしっかり押し花用に植物採集をしてきました。神戸では同じフロアで仕事をしていた会場の職員に次のイベントの交渉を受けるなどという出来事もありました。

ふれあいフェスティバルin明石、西宮、姫路

県民のお祭りとなるふれあいフェスティバルでは、2001年10月明石、2002年10月西宮、2003年10月姫路に参加しました。規模の大きな祭典で、ありとあらゆるプログラムがあり、参加者の目的が通常のイベントと異なるため圧倒的な人出の割には落ち着いていました。しかし、西宮では1日に212枚、明石では2日間で320枚、姫路では2日間で220枚のしおりを作ってもらいましたので、考えてみるとかなりハードなイベントでした。

ひょうご森の祭典in淡路東浦

2000年5月淡路に行ってきました。森の祭典ということでいろいろな植物関連のブースが目白押しでした。人出もかなりあったので期待も膨らみます。しかし、通りがかりの年配の女性に「こんなその辺にいっぱい生えとるよ。」と言われ、それもそうだと、妙に納得してしまいました。その言葉どおり前に行く人はほとんど関心を示しません。今日は「不発？」と不安がもたげかけたその時、開会式典で美しい歌声を披露したタカラジェンヌの卵たちが「キャーッ」と歓声をあげて群がってきました。「カワイイッ」「ステキッ」この日は材料に「スマレ」をたくさん準備していましたがもう大変！あとは伝え聞いた卵さんのお友達が次々と。そしてつられて一般のお客様も。ほんとに大変な一日でした。タカラジェンヌの卵さんたち、ありがとう。

ボランティアメッセ2004in未来館

2004年5月東京に行きました。ひとはくから始まったボランティアメッセが日本科学未来館で開催され、花工房も参加しました。このときは「ツクシをこんな都会でしおりにできるなんて」と感激の言葉が聞こえました。大都会での野の草花のしおりは興奮のるつぼと化しました。160枚のしおりを作ってもらっています。

4. しおりになった植物たち

8年間で押し花に取り上げた草花は、記録の残っているものは約180種です。(付表参照)

来訪者に人気のあるものは数多くありますが、中でも、ツクシ、タンポポ、サクラ、アジサイ、コスモス、クズ、ツタ、スイセンなどは変わらぬ人気です。また、センブリ、フジバカマ、ハギなども劣らぬ人気です。

しおりにするのに苦労する植物もあります。花びらの薄いもの(ツククサなど)は電子レンジで乾燥した後、紙にくっつき、はがすのに苦労します。試行錯誤の末にクッキングペーパーで挟んで乾燥しているのですが、それでも成功率はよくありません。また、肉厚のもの・水分の多いものは電子レンジでの乾燥時間を多めにしますが、加減が難しく焦がしてしまうこともあります。また、葉の表面の薄い膜が加熱中に破裂して製品にならないという事態も起こります。(ハナツクバネウツギ・スイセンの葉など)。平面的な形状のものは容易に押し乾燥できますが、厚みのあるもの、筒状に咲くものは、きれいなしおりにすることが難しいです。

一方、メリケンカルカヤは乾燥シートに挟むだけでできます。一般的に葉は厚みが比較的一定ですので短時間で電子乾燥ができます。また、紅葉した秋の樹木の葉も、乾燥シートに挟むだけでできるものがあります。

5. クラフト体験コーナーの作品

「押し花のしおり」以外に、クラフト体験コーナーから、さまざまな作品がデビューしました。豆雛(トラ豆、タンキリ豆を使った雛人形)、ダチョウの卵のアクセサリー、羽子板、追羽根などが代表的な作品です。これらの作品もご紹介します。

豆雛（図3）

季節の作品を考えている時にトラ豆と出会いました。豆の長径の半分が茶色で濃淡の模様があることからトラ豆と呼ばれている食用の豆があります。これを胴体にしたら何かおもしろい作品ができるのではないかと考えました。頭は漆黒のタンキリマメ、細い筆で顔と着物の模様を入れます。ススキの茎を切り台座にしました。菱餅もフェルトで作ります。ついでにサルトリイバラで3人官女も作ります。

準備作業は一同大変でした。豆をボンドでくっつけ細い筆で顔、着物の模様を入れるのですが、豆をくっつける段階で手こずり、模様で手こずり、でもこれは絶対に来館者に喜ばれる作品だと確信があったので楽しく準備しました。

はたして、それは衝撃的なデビューとなりました。子供たちにプレゼントしたいのと、まとめて求める人、手作りショップを運営する会員からは在庫全部ほしいとまで言われ、あわててしまいました。その後、この作品は一部手直しをして新しい作品になります。竹を節の上で斜めに切り内側に赤いフェルトを敷き、この中に女雛を入れて「かぐや姫」と命名しました。この発想の転換のすばらしさ！

しかし、なぜか豆雛の衝撃には及びませんでした。お雛様にはみなさん特別の思いがあるのでしょうか？

ダチョウの卵のアクセサリー（図4）

ダチョウ牧場に関係者がいることはラッキーでした。健康志向の世の流れは日本人にダチョウの肉や卵を食する習慣を根付かせつつあるのです。ダチョウの卵はニワトリの20倍以上。殻の厚みは約2ミリ。表面はつやがあり、まるで陶器です。この殻を使ってアクセサリーを作ろうとみんなで考えました。

適当な大きさの殻の破片に紐通しの穴を“ドリル”で開けます。殻の上に好みで絵を描いたり、押し花を貼り付けます。サインペンだけでなく、ラメカラーのマニキュアを準備したところ、これが大ヒットでした。押し花を貼り付けた場合は保護のためニスを塗りました。最後におしゃれなひも結びで仕上げます。この結びがポイントで、とっても素敵なアクセサリーに変身しました。

ダチョウの卵の大きさを実感してもらうため、会場にダチョウの卵1.5kgと同じ重さのにわたりのたまご（ゆで卵）23個と秤を展示しました。子供たちは卵に触ったり、秤にのせたり、大いに楽しんでくれました。



図3. 豆雛（まめびな）
とら豆の模様を利用して胴体に、タンキリ豆は黒くつややかな頭になります。ススキの茎の台座に座ったお内裏様はサルトリイバラの三人官女を従えて「ひなまつり」。



図4. ダチョウの卵でペンダント
厚さ2mm位。陶器に似た表面に押し花を貼ったり、絵を描きます。

羽子板、追羽根

お正月遊びの定番は「はねつき」、「たこ揚げ」でした。そこでなんとか羽子板と追羽根を作れないかとムクロジさがしを始めました。追羽根はムクロジの種子を核にして作られていることが今では忘れられているらしく、ムクロジの木はなかなか見つかりませんでした。神戸の森林植物園にたどり着き、落ちている実を拾い集めてきました。

2001年1月の花工房で手作りの追羽根と羽子板を展示しました。その実物を見た人は「近所の神社にムクロジの大木がある」とか、「子供の頃よく作りました」という反応がありました。そのうちムクロジの立派な実をたくさんいただき、次は「羽根だ!」となりました。水鳥が多数飛来することで有名な伊丹市の昆陽池で羽根を拾い集めました。多人数に充分間に合わせるだけの量はなかなか大変です。そのうち、養鶏場では鳥の生理現象で落ちる羽根を廃棄処分していると聞き、大量に送ってもらいました。羽子板は人と自然の会のクラフトクラブの達人にカットしてもらいました。これで材料は何とか調達。

こうして年2002年1月20日「羽子板、追羽根手作り体験」を無事実行しました。ムクロジさがしから羽根さがし、そして羽子板切りまで本当に多くの方の情報と協力、そして楽しい準備作業。幸せなプログラムでした。

花工房の今後

花工房8年間の活動を振り返ると、そこには、いつも前向きで、ひとはくを愛し、花工房を愛した澤マズミ会員の姿があります。私たちは、豊かな発想でアイデアを練り出す彼女に賛同して集まった面々です。「自分が面白くなければ来館者に楽しんでもらうことはできない。」との思いはメンバー共通です。新しいアイデアにみんなでいろいろ意見を言い合いながら、分担しつつ進めてきました。個性的な仲間がうまくすみ分け、花工房を盛り上げたいという共通の思いで連帯しているからこそ、ここまで継続できたのでしょう。ダチョウの卵バージョンⅡもすでに開発、押し花も新しい展開を開発中です。お正月バージョンもクラフトクラブの協力を得ながら模索しています。他のグループとの共同開催?も視野に入れつつ、これからも協力しながら来館者のハートに迫る展示を工夫していきたいと思っています。

謝 辞

最後にこの報告書を書くにあたり、人と自然の博物館の布施静香先生、藤本真里先生、八木剛先生にお世話になりました。ありがとうございました。

(注1)「ボランティアデー」

1997年5月から、毎月第3日曜日を「ボランティアデー」と称して、博物館ボランティアの自主的な活動を行う場とし、以後毎月来館者が自由に参加できる体験型イベントを実施してきた。博物館が主催するイベントも同時に開催することで2002年からは名称を「はくぶつかんの日」とし、2007年度に至っている。

付表、2000年から2007年の8年間で花工房がしおりに用いた植物

シダ植物	ユキノシタ科	コチャルメルソウ	シソ科	サルビア属	
イワヒバ科	ク라마ゴケ	ユキノシタ科	シチダンカ	シソ科	ホトケノザ
トクサ科	スギナ	ユキノシタ科	ネコノメソウ	シソ科	ラベンダー
トクサ科	ツクシ	ユキノシタ科	ユキノシタ	シソ科	ローズマリー
トクサ科	トクサ	バラ科	ウメ	フジウツギ科	フジウツギ
ゼンマイ科	ゼンマイ	バラ科	ウワミズザクラ	ゴマノハグサ科	オオイヌノフグリ
コバノイシカグマ科	ヒメムカゴシダ	バラ科	キンミズヒキ	ゴマノハグサ科	マツバウンラン
コバノイシカグマ科	ワラビ	バラ科	クサイチゴ	キツネノマゴ科	キツネノマゴ
シノブ科	シノブ	バラ科	サクラ属	スイカズラ科	ガマズミ
イノモトソウ科	タチシノブ	バラ科	ヒメキンミズヒキ	スイカズラ科	タニウツギ
チャセンシダ科	トラノオシダ	バラ科	モモ	スイカズラ科	ツクバネウツギ
オシダ科	ベニシダ	バラ科	ヤマナシ	スイカズラ科	ハナツクバネウツギ
ヒメシダ科	ゲジゲジシダ	マメ科	アレチヌスビトハギ	キキョウ科	サワギキョウ
ヒメシダ科	ホシダ	マメ科	カスマグサ	キキョウ科	ツリガネニンジン
ウラボシ科	マメツタ	マメ科	カラスノエンドウ	キク科	アキノキリンソウ
ウラボシ科	ノキシノブ	マメ科	クズ	キク科	アキノノゲシ
デンジソウ科	デンジソウ	マメ科	コマツナギ	キク科	ウスベニチチコグサ
		マメ科	コメツブツメクサ	キク科	オオキンケイギク
種子植物		マメ科	シナガワハギ	キク科	オオジシバリ
裸子植物		マメ科	シロツメグサ	キク科	カンサイタンポポ
イチョウ科	イチョウ	マメ科	スイートピー	キク科	キンケイギク
スギ科	セコイア	マメ科	スズメノエンドウ	キク科	コスモス
ヒノキ科	ネズコ	マメ科	タチオランダゲンゲ	キク科	サワヒヨドリ
被子植物		マメ科	ヌスビトハギ	キク科	ジシバリ
ヤナギ科	ギンドロ	マメ科	ハギ属	キク科	セイタカアワダチソウ
ヤナギ科	ドロノキ	マメ科	フジ	キク科	セイヨウタンポポ
ヤナギ科	ハコヤナギ	マメ科	ミヤコグサ	キク科	センダングサ
ブナ科	イヌブナ	マメ科	ムラサキウマゴヤシ	キク科	タンポポ
ブナ科	クヌギ	マメ科	レンゲ	キク科	チチコグサ
ブナ科	コナラ	カタバミ科	カタバミ	キク科	ハハコグサ
ブナ科	ブナ	トウダイグサ科	ナンキンハゼ	キク科	ハルジオン
ニレ科	アキニレ	カエデ科	イタヤカエデ	キク科	ヒメジオン
タデ科	アイ	カエデ科	イロハモミジ	キク科	フジバカマ
タデ科	イタドリ	カエデ科	ウリカエデ	キク科	ヤロウ
タデ科	イヌタデ	カエデ科	カエデ属	キク科	ヨメナ
タデ科	スイバ	カエデ科	サトウカエデ	キク科	ヨモギ
タデ科	ミズヒキ	カエデ科	トウカエデ	ユリ科	サルトリイバラ
ヤマゴボウ科	ヨウシュヤマゴボウ	カエデ科	ハウチワカエデ	ユリ科	チゴユリ
オシロイバナ科	オシロイバナ	ブドウ科	ツタ	ユリ科	ユキザサ
オシロイバナ科	ユウゲシヨウ	アオイ科	ゼニアオイ	ヒガンバナ科	スイセン
ナデシコ科	ウシハコベ	スミレ科	スミレ	ヤマノイモ科	ヤマノイモ
ナデシコ科	オランダミミナグサ	スミレ科	ピオラ	ツユクサ科	ツユクサ
ナデシコ科	カワラナデシコ	ミソハギ科	サルスベリ	イネ科	カラスムギ
ナデシコ科	ナデシコ	アカバナ科	オオマツヨイグサ	イネ科	キンエノコロ
ナデシコ科	ハコベ	アカバナ科	ヒルザキツクミソウ	イネ科	イヌムギ
アカザ科	アカザ	アカバナ科	マツヨイグサ	イネ科	エノコログサ
アカネ科	アカネ	アカバナ科	メマツヨイグサ	イネ科	スズメノカタビラ
キンポウゲ科	イチリンソウ	ミズキ科	ハナミズキ	イネ科	スズメノテッポウ
キンポウゲ科	オキナグサ	ミズキ科	ハナイカダ	イネ科	チカラシバ
キンポウゲ科	クロタネソウ	セリ科	ウイキョウ	イネ科	チヂミザサ
キンポウゲ科	ニリンソウ	セリ科	シャク	イネ科	ネズミムギ
ツツラフジ科	コウモリカズラ	モクセイ科	キンモクセイ	イネ科	ハルガヤ
センリョウ科	ヒトリシズカ	モクセイ科	ヒイラギ	イネ科	ヒメコバンソウ
オトギリソウ科	ビョウヤナギ	モクセイ科	ヒイラギモクセイ	イネ科	メリケンカルカヤ
ケシ科	ポピー	リンドウ科	センブリ	カヤツリグサ科	カヤツリグサ
ケシ科	ミヤマキケマン	リンドウ科	ハナハマセンブリ	カヤツリグサ科	スゲ属
ケシ科	ムラサキケマン	アカネ科	アカネ	ラン科	ネジバナ
アブラナ科	タネツケバナ	アカネ科	クチナシ		
アブラナ科	ナズナ	アカネ科	ヤエムグラ		
アブラナ科	マメグンバイナズナ	ヒルガオ科	アメリカンブルー		
マンサク科	モミジバフウ	ヒルガオ科	ヒルガオ		
ユキノシタ科	アジサイ	ムラサキ科	ワスレナグサ		
ユキノシタ科	ウツギ	クマツヅラ科	クサギ		
ユキノシタ科	カシワバアジサイ				